



重慶メリヤス工場の破産宣告文書に署名する工場長の羅樹明氏

### '93 現場からの報告

## 北京で大忙しの洋倒爺

ヤンダオイエ

ただだっという事態には慣れない。それは当然だ。今までなら社員の子供は幼稚園にあがっても、毎月二十元ですんだ。水道代や電気代も会社が半額負担してきた。こうした恩恵がなくなっただけでも

痛手だ。これも計画経済から市場経済に変わるための陣痛としかいいようがない。企業レベルから個人まで、競争することによって生まれかわり、成長する。それでこそ社会にも活力が出る。それがこそ社会にも活力が出る。それがこそ社会にも活力が出る。

重慶メリヤス工場の倒産は全重慶市を震えあがらせた。倒産のニュースを伝えた九二年十一月三日の「重慶日報」は、〇・一元から〇・八元まで上がった、という。

当工場の定年退職者は九百人、定年退職管理委員会が責任を持ち、その待遇は国の規定通りで今までと変わらない。だから生活は維持できるのだが、企業から出ていた各種の手当が消えてしまった。

「毎日、清算委員会に苦情がきますよ」と責任者はいう。問題は要するに「再就職」についてだ。政府に配属されて工場にきた復員軍人や、大学、専門学校卒業生は、われわれは国の指示によってこの工場に働いてきたまでだ、工場が倒産したのは個人のあやまりによるものではないのだから、国は責任をもって再配属すべきだというのである。

取材中、三十歳をちょっと出た感じのモンゴルのお客が、五元の絵柄Tシャツを指さしながら店主と値段を掛け合っているのを見た。

北京の日壇路は各国の大使館が集まっている区域だ。この周辺を散歩していると、青い目の外人さんが大小ささまざまな荷をかついだりぶら下げたりして、忙しげに道を行く姿をよく見かける。彼らのほとんどは主として衣類を仕入れに来ている人たちで、北京人のいう「ヤンダオイエ」(洋倒爺)、つまり外人ブローカーである。

大使館地区からほど遠からぬ雅宝路に、最近のしてきた露天の衣類自由市場の一つがある。ヤンダオイエたちが一番ひいきにしている所がここなのだ。記者はこの雅宝路の現場に行くと

みた。両側の歩道に陣取って五〇〇メートルばかり、個人経営の露天服屋がぎっしりと並んでいる。五百店はあろうか。ダスターコート、ジーンズ、ダウンジャケット、スポーツウェア、ツーピース、スーツ、Tシャツなど、季節と関係なく何でもそろっていて、目がちかちかする。あちのブリス、こちのブリスで品物を眺める人、選ぶ人、詰める人。値段を掛け合う声が絶えず聞こえてくる。三輪自転車やワゴン車が一台また一台と荷を運びこんで、なかなかの繁昌ぶりだ。管理責任者の話では、もともとこの辺りには、外国人向けにちよつと

もころあいな上に、よく値引きしてくれるので商売がやりやすいと、彼らはすっかりお気に召している。おまけに足の便もいい。

店主はまず電卓に押し値一枚三・八元と出す。しかし彼は不満で、自分の電卓に「3」という数字を押し、店主はしきりに「ノー・ノー」と手をふついている。彼はあせらず値引きを求め、結局三・五元で手打って、まとめて二百枚を買った。このヤンダオイエはアトルといい、

国家公務員だったが、貧乏暮らしに見切りをつけて、出張を機に「プロカー」の仲間入りしたのだ。彼の話では、北京に着いたあと、すぐに持ってきたじゅうたんやカシミヤセーターなどを売り、三千元を手にした。それから電卓をふところ、頭の中で「いくら」や、「小売値」や、「卸し値」などと、習ったばかりの中国語をくりかえして暗誦しながら、ベテランの仲間と市場にきた。前門、秀水街、雅宝路とひとまわりして、衣類市場の最新情報を探った上で、仕入れにとりかかったという。

旧ソ連から来たあるオシドリ・ヤンダオイエは、思い切りよく雅宝路に近い日壇賓館に部屋を借り、腰をすえて商売をやっている。このカッブルは毎朝八時から午後五時まで市内の大きな衣類市場を何カ所かまわって、夜になるとはちきれそうな赤いふくろを自転車に乗せて賓館に運びこむ。そして水曜日ごとに早々と北京駅に駆けつけ、仕入れた服をモスクワ行の列車にのせる。



今日もしこたま仕入れて「ヤンダオイエ」はご満悦

はじめに北京に来たときヤンダオイエを臨時に演じて成功した。これらの人気商品はウランパトルなら四倍の値段で売れる見込みだと、彼は言っていた。

歴史と民俗を探る 特色ある博物館を紹介

わずか半年のうちに二人は大いにうけて、数十人の中国人個人経営者とも知り合いになった。両者はしっかりと情報をやりとりしているし、気もあっている。現在、このヤンダオイエのカップルは、中国人の仲間と合併で服飾貿易商社を作り、共同で国際服飾市場を開こうと計画しているところだ。(本誌・劉東平)

人民中国雑誌社 共同編集 東京美術

## 郭伯南他著 中国文化のルーツ

A5判/カバー装/180頁



定価 1.545円 (税込)

東京美術

〒101東京都千代田区神田司町2-7

人民中国雑誌社 共同編集 東京美術

## めぐり 中国博物館

歴史と民俗を探る 特色ある博物館を紹介

A5判・カバー装/130頁/定価一、二、三六円(税込)

東京美術

〒101東京都千代田区神田司町2-7